義仲勲功圖會

三

遠
2508
10-3

遠
2508
10-3

義仲勲功図會前編巻之三

目録

駒王丸幼稚奇行
兼遠駒王丸の賢愚を試図
義仲惟力制奔牛　同図
巴女勇力
義仲主臣巴女が勇力を試る図
義仲与頼朝誓約
義仲与実盛對面　并義大虎丸之事

義犬悪女年を咬で恩を酬ふ図
義仲母公死去　観心房相義仲
根井大弥太勇力の図
根井父子屬義仲旗下

木曾義仲勲功圖會前編卷之三

駒王丸幼推奇行條

浪速　山珪士信考訂

却説信列木曾の住人仲三惟頭兼遠と実盛が頼ふ憑ふ義賢の遺孤駒王殿を預り撫育しまるふ此兒天性媼順ふ〻如何なるふ〻有ても啼こと〻なく怯ることなれば兼遠大ふに歎美し流石八幡じの御末孫なる玉樹長新枝と唐人の賦せしもの〻ふ公達の妻ふこそ虞山汀南の人八兒産まく二才ふろ〻頃弓箭刀鎗其外所有諸器を其子の前ふ陳ね兒の意ふ任せ〻其を探らせ其初〻手ふ挂る物ふ付智愚貪廉を勘考し其好む道を学び究さしむ〻ぞ此若君を也丈ふなるひく拭し凡と兵器楽器儒書兵書筆墨の類を〻ぐ〻衣鞠振鼓木偶花車の類ふ至るまく廣間ふ〻ぐ〻遥の此方ふ小技殿ふ駒王〻を抱き進ら〻せく坐ふ著扱兼遠駒王殿ふむ〻ひ彼処ふ並座ス〻中ふ若ず御心ふ欲とまがを物を〻りまとゆれば僅ふ二才

の駒王丸の完示しく母御前の膝を這下り突然しいぐり行て並居たる
諸品を見ちらしまゐ小技ごのくさ乳母侍女小八木偶共やとりあつ花車どや
ちうまつと用も放まどちらる小駒王丸の頃ちるゐと這寄て先兵書を
把く左小抱へ右の手を指仲生羽の征箭一筋ちつく再びいぐり戻り母の
膝小這上りまつ乳母侍女共を覚しく惘呆さりの兼遠双手をさしあ実摘
擅ゑ三葉より馨しとりや茅く並ちる中小も小児の好む餐菓子木偶小も
用ちりまゐ五書といひ箭といひ武士の専ちる物を把まつ賢さよ
天晴成人の後八和漢小学ゆる大将軍小やなりまつちとく悦ぶし限りなく
見より弥心を用ひく難云月しちり小技ごのも未頼母しくみりひ昼八諸士ご射
術剣法の稽古ちるを駒王丸の小見せ度ちる兼遠ご子息若侍を集へ
聖経を説兵書を講ちる席小在て駒王殿小聴せくる小女しも倦退屈と
る気色なく是八勿論夜も講釈の終るまご眠まゐと乳を飲菓子を食

ちるうち代も忘まく跳入まつ又見を寄とせり斯て年月何ちうち
駒王丸の早七才小成まつ小形貌大なるゆ十歳ごりの童のごく些も飽まご
強く十才以上の童も及し難ごと只兼遠ごすの兼若殿小今当年八才小しく
駒王丸のと牛角の力量あり駒王丸の心荒そしく一拳小よく犬を撃ち一脚小鹿
を殺しまつ而のみならず四書五経をちつの兵書なんど代も暗小通しまつ
ど兼遠小ちる代君いまご経典兵書を素讀しまゐる小何日の程小暗記ご
ちると問駒王丸の微笑く我母乳母が懐小抱れし三才の頃より夜毎小御身ご
講説を聞何ちう暗記ど覚ちうと答へまつ兼遠舌を震しく驚代君
八神童なりちと試小聖経の篤失を對論ちる小駒王丸の兼遠ご問程のうと
答まつて流水のごく一言半句も滞らど数年切磋の輩とくらべもくみゝぶ
る能ごと是ちり兼遠駒王丸の小射術を教へ剣法を傳などちる小一をきて
十を知聡智なれば幾許なくごく緒技小熟しご太刀小早業緒人の目を

權頭爭遠
狗王丸乃
智愚を
試を図

ずゝろをと行なり。此外假紛の游戯あり。陣を布隊を整へ、專ら攻伐のまゝもてび
をなし。あり去程に日月に爾宇なく、殆王ごの早十五才にもなりむひれば。兼遠
烏帽子親となり元服させ進ぜれば母御前小枝ごの大いに悦び。又義賢
の一字と中三の中の字を象りて是より木曽冠者義仲と称し。此比
都に八平相國清盛朝權を擅にし。暴悪の聞え遠近に隱なれば。一時
義仲兼遠に向ひ仰せられは。某如ぐ物語に聞し。父義賢大倉ヶ谷に陣没し。我
も義平ぐ為に失なるべきしに。畠山重能齊藤実盛と申しぐ情ある。辛紀命を
助られ斯御辺ぐ厚志を受撫育に預るよし。因て我稚名を心ゆも天晴人となり
ば。父の仇義平を討て家名を引起さんと。日月の立を待なるに。其甲斐なく保元
に八祖父為義ちゞ一族悉く討死。引續て平治の役に義朝亡び仇敵義平も
虜となりて命を損じれば。我宿望空しく中途にして廢れ。さば武道を捨
出家入道もとゞ成なれども。今平家世に跋扈して日本過半を領し暴逆を擅

にして源家に有しも無ごとし。然るに是平家を我家門の仇なり。某八幡殿の
末裔として他に忍び難き。蟷螂立車の譬に似れども。何卒一度義旗を翻
し運に合ぐ奢る平家を斃し廢亡さるる家名を興し。且上帝王を補佐し
下萬民の苛政を弛めんとあり。以付都鄙の地の判を案じ。世の動靜を窺ひ
為に諸國を經歴して思へば。兼平兼光両人も某と俱に啓行せしもあるべしと仰
す兼遠歩點首実して宜しく。某君を実盛が手より預りて日より天
晴名將に仕へあげ父祖の家名を引興させんと。昼夜心力を盡せし甲斐
有て天性の智才勇敢百万騎の大將軍になりて機角を顯れ。今
清盛を保元平治両度の軍功に募り其身を誅する德なくして太政大臣の極官
を汚し一族を高位高官に進め。帝王を蔑如し暴悪日々に增長されば。久し
からず彼一門滅亡。當時平家を征せしの伊豆の佐殿頼朝君の
外に八有る。されども小松の内府重盛忠直仁智の賢人にして上を敬ひ下を

恤て清盛の暴悪も内府の徳に掩はれ、いまぐ天下の人心平家を背く心有べからず。此間に諸國の地の利を察し國々の剛億をも試み且を伊豆の佐殿の面會し、潛に大義の謀を示し合せ給へと俱々に勧められぬ。義仲大に悦喜あり。今井四郎兼平樋口次郎兼光と田舎武士の京内詰しるに躰に扮装兼遠に別を告て曾を立て先都へと上るべし

義仲怪力制奔牛條

斯て義仲公兼平以下に諸雑人信列を幾足し処々の地の利を尋ねつ陣場戦場の使を考へ悉く画圖に写し急ぎ旅の心安さ茲に三日彼処に五日滞留し往々て加賀越中の竟に入るに前面に一座の大山有土人に其名を問に礪浪山なりと答へ義仲主従頓て山中へ分登るに路嶮峻に巖岩峙ち老樹茂樹に日影を掩へば白昼も猶暗し扨七曲九折の難路を行こと廿里一町ばかりに及べば人家もあ

も見ぬ西山に沈む果て星の影ばかり木々に遮れ路いよ〳〵暗くなり只それ暗穴道を蹈が如くなれば物に動ぜぬ義仲主従も十分飢に臨む足も疲るれば殆と歩まるべし傷の岩角に腰掛け暫時息を休め居るに忽ち山上より叫喚ぐ弦来る人音を聞て主従紛れに近付き見を見るに先に立て者は拒火を振照し後に続く者は素手揮て喧ぎ〳〵走り下る。兼平彼に向ひ各を何すの有て斯遽〳〵逃惑ふ〳〵やと問に一人の男大息吐て曰我々は此山下の者ゆへ今日山上の柴を刈おりるに日を暮し居る一人の者牛に柴を負せ拒火を牛の角に結付て我々と噺りの〳〵下るに彼拒火漸々に近く〳〵大屑や牛の頭に落るに忽ち渠吼り狂ひ負る柴を刎落し先に立る男を角にかけて遥の谷へ投起し其の根岩角を躍り超る其勢ひ烈〳〵結付し拒火の頭へ焼るに随ひ倍荒て蒐りに迫きるりぬと結る内に早件の牛吼るに起きるに恐ぶ山賊も須驚きて〳〵雲

霞ふ麓をさして逃行るり兼平兼光も牛の勢ひ猛烈なるふ恐ろしく主を引く傷へ避ろうとんとて義仲女一も動ぜる色なく蒐来る牛猛闘と云へ。うろく回るゞと乃る間もなく片手ふ尾筒を掻つかみ曳戻し云く曳戻し一ゆ。さしもの荒牛金剛力ふ曳留られ吼ゆるゞ三段ばかり曳戻され大いふ怒り。身を搏ゞく義仲を角ふ掛んと起るる義仲早く身を躍し牛の背（闘ひこと起る）腰刀抜手も見せぬ拒大結付る方乃角を横ふ切捨ゆ。太刀ハ希代乃名刀主も希代乃手練かれだ。さしも堅剛乃牛角も行を切ゞくふ切起り此躰を見て今井樋口も一番ふ蒐寄牛乃鼻緒とる曳居一すも働ぜず。今迄狂ひし牛も大力乃者ふ曳ぜられし上。角ふ怒るふ拒大乃恵を忘れしかし漸々ふ鎮まりて兼平兄弟頓く傷乃樹の根ふ牛を繋ぎ置れだ。義仲公ゞふ牛乃背より起下るるの岩頭ふ腰ふ掛ゆ。今井樋口其外乃奴僕共ゞも主の怪力早業を見て感歎し。絨ふ君の神武を能見下の御ゞ

なるゞと舌を巻くゞ恐ぜざるる。義仲微笑し一ゆ。昔齊の田単即墨乃城ふ篭り一時燕軍多勢ふて囲を攻るゞ急なり。ふ田単謀を案じ一城内乃牛千余頭を徳集め牛乃身ふ五彩乃竜文を画ゞふ衣を着せ兵乃を其角ふ束ね。ふ油を洒ぐ牛の尾ふ結付其端ふ火を付け夜中一齊ふ燕軍乃陣へ放し。其後ふ軍勢を進めて夜討しるふ彼牛尾乃燃るふ驚れ狂ひ燕乃陣ふ乗入三軍を突倒し踏殺す。敵軍大ふ恐ろふ是を見るふ五彩の竜文火光ふ英ゞく何ふも見とけ難く其猛威ふ辟易し大崩と成て敗走しるゆ田単敵を討て数ふず終ふ燕の為ふ攻取れるふ七十二城を奪返しるゞ。史紀ふ載られど其ゞ見ね唐土乃昔絵我寸目前ふ火牛乃勢ひの鋭を見るゞふ今宵ゞ其真ふ鋭を見るゞふ事も自然と縛暑乃助ふなるふも有ふと絶り。ゆ。緒人感称し。君公勇力のふ有あるゞ智略もまさ田単ゞ下ふ出むゞと称し其処を。其後ゞ山中の樵夫

義仲勇剛
奔牛を
制する図

り奄に宿を需て一夜を明し

義仲与頼政對面條

斯て其翌日義仲主従八砺浪山を越て越中越前若狭路を経て都に著し

て所々を見物して絍に平家の繁昌まさしに勝り国を抜ん事を待

たり然るに義仲の別腹の兄六條判官仲宗兵庫頭頼政が親子と成て在し

兼て聞及ぶ晴に頼政が邸宅に赴き案内して是を信列木曾な

る仲三権頭兼遠が手に親育せられ故帯刀先生義賢が遺孤駒王丸なり

い今の名は木曾冠者義仲と申せり今般洛中見ん〳〵忍て上りぬ

ぜば對面むつまじくと従者を打つて言入れられば折節頼政在宿して是を

聞一度は驚き又一度は悦び客舎に請じて桑蓬の饗應をなし義仲も身を

思ひ国全武士に扮装たれば自ら縁遥初見恭の會釈あるゆゑ頼政其人品

を見るに白面秀眉言語動止自ら名将の風を備へたれば心中悦びに不堪

扨て〳〵これ〳〵等の事ども早十五年の昔賢又帯刀先生は一時の短慮より

無名の軍を企て義平が為に落命有しより都へ出て〳〵我も縁に引かれ

悲歎言ん方なく御身は二才の年何卒尋ねん〳〵と思ひ親育せ

しく在所を尋ねもとめ〳〵も早行衛知れず義平様御身の所在を厳し

く詮索せしより弥心苦しく年月に後に出で人有て仲三兼遠に紙一通

より扨心安らんと女心安堵られども是彼公私の要用繁なに遠らざる一度の

音信をも通ぜざりしに其を恨とも思ひ尋ねて嬉しさよ源家は保元平

治の役に断絶して其独世に有ざる御辺に心ゆも一門の義を今平

家に阿諛ひ身を安んじるし思ひ〳〵られども露さら所存なし平治の乱に

も始て内裏方に地加り君を守護して君信頼が暴悪を憎み

潜に六波羅へ御幸せ参せしに六波羅方と成て是に依て清盛も同

る者なれば我も君の龍駕を暴ひ六波羅方と成て是に依て清盛も同

源家の類族なれども我一家耳を安穏ふさ〜置りされども我一門の泯滅を
他ふ見て〜虎狼の平家ふ隨ひ〜と豈心ふ快らんや。何卒時節を見合せ
源家再興の緒を思ひさだめやとおもひて久しくとりくらし。平家の運ハ旭の昇がごとく
西夷八蛮ふ虎威ふ伏し靡かぬ草木もあらざれば我一家の勢をもつて事を
なし遂ぐるあるべき。時運の熟するを待ハ不如と世人の嘲りをも省ず
徒ふ今日まで見合居り。然ハあまりにも盛なる者ハ必ず衰へ奢れる者ハ
必ず滅ハ人世の常なり。倩清盛が奢侈兇暴を見るふ已ふ一門亡滅の萌
を顕せり。源家再興の時節恐らくハ其年の外ふ出ざるべし。御身も八幡殿
の後胤義賢の二男なれば時ふ縁躰をなしひ時の熟するを待て君の御
大事ふ参り合。又祖の家名を引興ひ更ふ去ては平家子孫の永久を糾
す。源家の枝葉を根を断て葉を拔んと。ふ如も豈ふ心を置む講て我
こそ先生義賢が子よりなんぞ名称して世人ふ知れふ。今日本ふ源氏

類葉猶是彼在が中ふ。蛭が小島の頼朝ハ大将軍の機を備へられで平家の大患
ハ彼人ふ有べし。御身も頼朝と心を合し。今暫く身を潜め名を埋み〜栄花
の春を待べ。永く都ふ徘徊〜平家の間者ふ出されぬで。禍ひ忽ち其身
ふ及ぶ至れて。疾く本國（下野）へ。世を忍ぶ御身なれば是より音信を通せ
んも人の疑を生ずる恐あり。互ふ音信不通たるべしと。流石老練の頼政理
を察し〜或ハ厲し或ハ戒め申されぬ。義仲深く感悦して仰ぐハ御教訓の
如くふ。其肺腑ふ銘して忘却仕るまじく。某扁鄙ふ入となり昏愚ふして
又祖の家名を引興ひ程の澤量なしとて。君の御大事といふハ身
命を抛て犬馬の労を辞しいはんやされるふて。頼政益々悦び子息の仲
綱・頼子・仲宗なる者を呼出して名對面させ酒宴を設て饗応ある義仲
後厚く謝して此処ふ止宿せること三日。蚤々ふ行末の事ども示し合せ別れ
告て立出れば。頼政甚だ余波を惜て國宗の太刀一振餞別ふ引。後會

を約〳〵遂ふ袂をつらねそ

巴御前勇力之條

扨義仲主従を都の地利を委〳〵見廻り。それより摂河泉大和路を経く再度山城おうち。東國もづ我も一見せんとて。江列より美濃路を径歴て。次大垣の八幡宮へ参詣せれそふ社前の馬場ふ四五人の青侍責馬〳〵互ふ秘術を尽〳〵曲条輪奉種々の芸を競合てあり。義仲主従立停り見物せ〳〵れそふ。青侍ふ奉草刈〳〵脇ふく馬を繋ぎ息を休めそう折〳〵もあれ。俄ふ旋風吹裳〳〵青侍の僕う辺ふ有そう五六蓋の菅笠一度ふそうと吹散そう。其音ふやはづろ紀そう。一疋の馬忽ち狂ひ出〳〵。繋ぎさる口綱曳切〳〵散ふ馳出〳〵ぬ。仲間小者此躰を見て〳〵大ふ周章〳〵。是を曳留んと馳行ど馬八頻ふ嘶〳〵近付者を刻蹄〳〵踏仆〳〵狂ふぞ往来の老若大ふ騒動〳〵小児女童八迷惑ひ〳〵泣叫ぶ。義仲主従も魚を醒〳〵馬の跡をうち走て使即乃義を仰含られ出るべくいそんとやふうり。宮実もとそ潜ふ義盛武名れ

藏人行家傳令旨義仲條

紘ふ十郎義盛八所用あり〳〵都ふ上るとのべ。平家の議論を聞ア〳〵潜居そふ。夜陰ふ及び俄ふ高倉宮より仰含さる音あれバ付侍ぞ。御使をうつ〳〵中させ出ふう。何事ふや即刻衣服を改め。御使者とは伴〳〵宮へ参上〳〵。御前の躰を窺ふ。源三位頼政一人付侍〳〵。其外ふ八人もなく躰なれど心緩ア〳〵遥乃北方ふ平伏〳〵。義盛召ふ憑〳〵参侍〳〵と敬命を宮殿ふ御機嫌〳〵御座近く召ま。夜中俄ふ招ア寄るる。一大事成頼入〳〵れ。如何ア〳〵と宣〳〵。義盛畏ア言甲斐ア成事を武士ぞ〳〵思召。御頼といふ〳〵於て。如何ある御大事ふ〳〵違変仕るまじく〳〵と。即時ふ神文を認め血判〳〵呈〳〵れど。宮恨ア御悦喜ア〳〵れ〳〵頼政委〳〵ア〳〵せいて仰ア。ふ〳〵二位入道を顰め言乃思召乃水末残らと演舌を。十郎ア〳〵大ふ悦ひ三度拝〳〵

微臣苟も庭尉為義の末子と云。遠ク熊埜ニ潛居して打惜し。天晴時節もあらば。一度素懐の旗を開て君の為家の為暴悪の平家を亡し。年乃鬱憤を晴し。と三所権現に祈誓をかけ祈ぬ日しても叶ざりしに。現臣が微志を納受なし給ふ。厳命を蒙りなるの難有さ。某御使を奉り。東國北國の源氏どもに今旨を廻し。誰か違背仕るべき。不日に一言報恩の家人を漏集ん。我も〻と馳登り。終略を定め平家の一門を攻殺せんず。朽木を砕くよりも安く。と吏なけ申ける。三位入道是を制し。こゝ一大事の御使淫忽に成せ給ふ。怒ち世に知れさ宮の御身に禍ひを蒙らせ給ふべし。世を取ること十余年。昔源氏禍ひを蒙らせ給ふべし。平家無道なりとも。世を取ること十余年。昔源氏の家人なりしも。今は平家の録を食ん。自然其恩義に感じ。源氏の旧恩を忘る者も多ん歟。然れば能々其心腹を探られて大事を絶ざる。心を心を誠の吏を隠密に成べし。と戒られた。十郎此中に紛れ老法師

が申し義なり。貴老に頼入ることの有て推参し。苦しうず。席上を糾し。
申しもとゝ仰る。老人手を打て。妨嫌草屋を厭ひ。先
彼処へ通らせ給へと答へ。義仲悦び。今井樋口と倶に一間所に入。主客坐定
すりて後仰る。某特に参ること別事なし。今日八幡宮の境内に
て責馬を見物しに。云云の吏に馬の荒出せし。御息女乗り
給ふ。曳鎮の。余の子の床しさに。御息女と知己に成ばやと。まづ一面の
交りを成ん。貴老の宿へ参り。某は木曽権頭兼遠が嫡子に義仲と
名称者なり。貴老に以前弓箭に携り。願ハ姓名を顕し
息女に一面の交を結ばし。と宣へば。安太夫は扨ても。権頭兼遠の
音に聞し木曽の住人。其御賢息の入来ること辱し。其は武士にも鳴
呼ぶ。近江の山本兵衛の方に事へし者に。八年以前に朋友
の縁言に浪々の身となり。富地に引籠り。土民となり。甲斐方の身

義仲主臣
旅中ゐ
巴子が姓名を
總取図

命を繋ぎ給ひしかそれより三年を経て妻をも先立て一人の娘を使ひ老を艱
ひし娘が名を巴とやいふ。當年十二才生得大形にして力も血気の若者に劣らず某が耕作の一臂を扶け信々親に事へ給れども今仰もうつ〳〵に不側の怪力ハ又くらべ某もおそれ恐るゝハ御僻目にて中〳〵義仲押返し。我眼前其行迹を見て感慨の余り斯推参せり。婦人を空しく民間の妻妾とせんハ美玉を泥中に埋むこと甚だ非禮なり。若し〳〵ず八某に賜ハるべきやさもあらば後年我室とし生涯見捨ハじ。御辺もまた我が曾孫きうく。農業を捨心閑に老を艱ひ給ハゞ村落に拐帰して聊勝りし人と困望あるに忠太夫此事を聞て心迷ひ。こゝ決をなすべ能ハゞと巴を膝近く招き死義仲の仰を云せ。汝が心を如何ぞやと問巴女深く愧らひ顔色に答なき中。女童の身に有まじき行跡なり。殿達に見咎られまじきの恥ハ〳〵人数なれ身をなく直ハをるを雑れ吾儕が心なく何と答へなり侍

る人なれ平日の御教訓なる女ハ家に在ては父母の心に従ひ嫁ては夫に従ひ老ては
子に従ふ人数なり。所なしと仰せ上ハ。左にも右にも父の御心に任
ん。但し吾儕が心ハ父を慕ふ育ち艱人あるに此身ハ如何なる憂苦をも厭ハ
と手素ぶりに定めたるなり。ぬと歳長くなれば安太夫大いに悦び。御身が年
来の孝心あるハさぞあらん。天晴古の安太夫なれ。幼れ卿にあるハ物を思
ふとも死るものを。零々落せし身ハ如何せん。されども天道ハ猶明かく御身が孝
心を冥感あれとそ。木曾権頭の賢息。なる植生の小屋を訪ひ来ぬりと
云く。義仲に向ひ。宣せ給ふ〳〵巴女の心ハ只某に寄まゐらせ給ふ。君に進ずる
る名具〳〵侍女婢〳〵も多く使ハせ給へと頻に義仲に引々るゆゑ義仲悦き恨
なく。一面の交りなれ我幸示の所望をも答ゆゑ息女を賜ハる婦〳〵
よ子まゐ若冠なれども息女を乞結ること敢く濃る心なり。何の家に
生まるゝ者ハ美悪にかゝわらず賢女婦勇をこそ具しなれと多年の望

ーホ。天幸ホ良縁を下ーくく。予ホ此婦を配偶ーヨく。初ハ我只息女ワ勇刀
をワく懇望せーホ。其言を少其人を見れば。容儀端雨ホーく賤ーくど。年
稚ーくワ身ワ栄利を欲せど。只父を孝親せん事を切ー健気さよ
夫孝八百行の源ホーく。士孝なれば君ホ忠なり。婦孝なれば夫ホ負なり。予
ちくず此賢女を得ること宿望遂ホ達ちる前兆ワ。但ー某ハ良ーより東國
を往歴ー古卿へくりく後使者をワりくく迎へ。其時親子ーヨ本宮へきく
ヒヨくと約定おホヨと巴女父子大ホ悦び。再拝ーく恩を謝ー村醪をワりくめ
きくりく約定ワ盃ーくりハーく。是ホ因ーく義仲主従ハ孟ホ一宿。翌日ち
旅粧ーく東國ちーへと赴れおひくホ

義仲与頼朝契約之條

木曽冠者義仲ハこゝに巴女を得く心悦び。濃列を立く尾張へ立越。そり緒ノ
國を往歴ー伊豆国蛭ワ小島ホ却りむれ。前兵衛佐頼朝ガ許へ立寄ヨ

此頼朝ハ故左馬頭義朝ワ三男ヨく。母ハ熱田の大宮司季範ガ女ワ重
名を幡屋ワ武者王ーヨ又鬼武者ーヨ中ワり。平治ワ役ホ源軍敗績ーる
時。父兄ー俱ホ戦場を抜落ーくるガ竜花越ワ山ロヨく味方ホ後ヨ只一人
東國を志ーく落るを。参河守頼盛ガ郎黨弥平兵衛宗清ーいく者生
捕ーく都へ曳くるホ。清盛ワ継母池ワ得尼深く頼朝を憐ミ小松重盛ワ
示ーー合せ。清盛を種々宥め。遂ホ伊豆國蛭ガ小島へ流罪ホ所ヒ。実ヒ是
重盛ガ深ク紆略ナリ。暗ホ其心計を量ワホ。其ハ頃関東ワ武士ハ平氏四
藤私黨をくゞめ。其余ノ輩モ往昔奥列ヨく前九年後三年ノ合戦ワ
剋ミ源頼義子息義家両将軍の旗下ホ属ー軍功を属ミーくガ。元来
頼義義家両将ーヨ武勇ハ和漢ホ例なく程ワ英雄ホく智略ワ古今
ホ独歩ちる大将軍ちとくヨ躬繕ワ高慢心なく英雄を懐け士卒
を憐む良将ゆえ軍功ある輩ホハ別ーく厚く恩録を与へヨ是ホ因く

諸人其智勇と仁德ふ心を傾け武士〻〻人者ハ〻ろ名將乃下風ふ立〻〻を其甲斐あれと押て源家を主君と仰た代々異変の心なく傳た事〻ふ怒ち為義義朝朝敵乃名を蒙る平家乃為ふ討亡滅せらハ平氏四藤私黨乃武士牙を噛ず怒り憤ま〻ふ朝敵乃名ふ悼りく猥ふ兵馬を動ふ〻ぞ〻れ〻も若頼朝を助ず殊戮せず其時ふと關東一致〻く京城へ攻上り源家乃吊合戦せと無念を忍び只管佐殿乃一左右を待居ふ然ふ重盛八朋智の賢將なれ〻早く間者を入て此ふりむたを安扱ふ頼朝を殊ず天下大乱を生ず〻〻先々死罪一統を省く東国二流罪〻當ふ関東武士乃心を弛せ時々恩惠を施〻く八平氏四藤私黨と平家へ飯伏ふ世介ん然〻〻頼朝野心を抽〻も殊せと安ず〻〻思惟〻ず兵を練ふ伊豆國蛭が小島へ流されふ當國の押領使伊藤二郎祐親ふ平家無二の忠臣乃〻兵權強き者なれ〻彼ふ密意を言含め厳〻〻守護ふ世

表向ふ重盛より頼朝へ折ふ衣服金銭を贈り萬事不自由なふ〻ふ〻紛らはされぬ佐殿も其密計を知召れ八深く重盛乃恩沢を感悦あり重盛ふ謀なふ〻〻深く悦び此上ふ関東武士の心を懐と先降人ふ出〻藤実盛を宿〻く武藏國武庫乃別當と〻〻其他熊谷直実平山季重岡辺忠澄なと〻皆是義朝乃頼ふ切〻る兵〻も多く強く平家へ冠〻ふ徒なれ〻も揖下の降参を宿ふと〻〻各本領ふ安堵させられぬ〻れ〻関東武士も重盛の仁恩ふ懐れ心を平家八鎬ふる徒も多〻〻り〻り嗚呼危ふ〻ふ頼朝乃〻重盛長命なら〻〻終ふ青雲の時あるべ〻ふ小松殿早く逝去せ〻れ〻八佐殿開運の端なり〻〻是八さ〻ふ佐殿八配流乃〻ふ永暦元年より應保二年ふ〻八伊豆乃神蛭敷坐乃構ふ館を構へ住む是を八牧乃別所と〻〻り〻るふ平家の一族別當兼隆と〻者聊罪有て都の住居を拂れ伊豆へ追下ふ八牧の別所ふ置れ

祐親へ下知ある是も実と兼隆を佐殿の横目ふせん為の謀なり。是ふ依
て佐殿八牧の別所を明ゝ〜ゝ。門国北條の神沼の館ふ移り。仁安三年
ちぐ任ず。時ふ義仲八兼光をもつて潛ふ案内させ是八故帯刀が二男冠者
義仲と申者ふて。推頭兼遠が紆ふ人となり。北度諸國を游歴の序。御
祐ひのゝゝ推参仕まつり。苦〜しくぞ八對面ゆるゝ〜とせさせ給ひ。折節佐どの
を腹心の郎黨安達景長と只二人囲碁ふて御坐ゝゝが是を見て大ふ悦
び。疾々いゝせられいと御答有ふよりて。義仲も喜悦ありて。ふ通り。約て佐殿
と對面あり。會釈〜く仰ゝゝ八互ふ親〜ゝ族なれども世の不肖ふ押恥ずて
らき。俱ふ日影の身なれば。御在所を知ゝ参じも。今日まぐ一書の音信も
も通ぜざるハ世人の譏論を憚る所なれば免させ給へ。某こそ帯刀先生が二男
駒王丸今の名を義仲と名称い。初て高顔ふ謁〜大慶何ゝ是ふ過ぎゝと
礼儀正〜く仰れば佐ゝも答礼ありて。誠ふ御身ふ曽ふ人となりて。

ゝゝゝゝ承まぐも。配流の身なれば一紙の素情をも通ぜざるいふ。ふ捨ゝと
山川數百里の旁を厭ゝ。紈紡の嬉〜ゝゝ。景長ふ命〜瓶子ゝ〜け
尉斗なんど取寄盃をとりゝハ。其より酒者を調ぐ一門王侯ふ昆ゝ酒宴
を催〜列位酔を発〜ゝ。其後深夜ふ却よりて酒宴を収め。佐殿〜義仲只
二人閑室ふ入〜膝突合〜ぐ。門の亡滅を悔〜平家の暴悪を難り。密〜義
兵の高議をなゝ〜ゝる中ゆ。佐殿仰ゝゝ。清盛時の威権をうして王
位を狂ゝ万民を悩ゝ敗亡せんと必せりといゝ。源氏八一且朝敵の名
を得れ八猥ふ無名の雄を上ゝ〜。天子ゆもあ是親王ゆもあ是。朝敵の罪
名勅免有〜。平家追討の令旨をゝふ賜ゝ〜ぐ。即時ふ一言報恩の武士を
集ゝ。我〜東國ゝゝ起り。御身八北陸道ふ旗を翻ゝ〜両道ゝゝ都へ攻上り
一平ふ平族を平げ。多年の爵憤を散じなん。但〜子と御身と何方が先ふ
帝都へ攻ゝ。互ふ向合せ。敢て自立の働ゝ有ゝ〜ゝと仰れ義仲も

然らば互に誓約をなすべし。斯く義仲茲に二日滞留あらば終に神沼を立往らば武藏に入らん。伯父昌貫別當能隆の許に寄行て両三日逗留しのまん。

義仲与実盛再會并義大虎丸之事

義仲は早能隆が館を立出て永井の春藤別當実盛が許に寄行て案内させ姓名を報じ申されば実盛大に悦び早速に請じ入賓主坐定まり茶菓を献じ後中さらば珍らしや豹王公其往年畠山重能が家臣憑に君いまだ二才の時母君と倶に其一族なり。権頭兼遠が家城に起居彼人に御養育の義を託せしこと。昨日今日の事に非ず指を折て早十四年の春秋を過せり。折に觸れ兼遠が消息に堅固に成長し給へ給へと公勢遑なれどいまだ参向して高顔を拜し奉ず。年来の遺憾に堪ずいざ駕を曲て御来臨あらば社嬉しく実も帶刀先生の公達なれば相貌形容又君に似させ給へり。天晴源家世に時めく人となるべし。肥馬に柔羅綾を著て前後後隨の兵數を従て召具し給へば御門を裏滅し平家繁昌の時代なれば千鈞の御身も僅に両三輩の従者に扶けらき草鞋を行路の露に沾し給へ痛しさよ。落涙しきれば義仲も恨涙に袖を漫し給へば稍搔暫く宜しかるべし。我嬰児の昔已に義平が家に宰せしかるべきを武重能と御辺の厚情に。身の横難を免れ兼遠が手に人と成ることを得たり。我を産し者は父母なれば我を生せし者は重能と足下と兼遠の三人なり。其恩の高きに比しては須弥山も猶低く深きに比べては蒼冥海も浅かるべし。然るに我不肖にして萬一の恩をも報ぜざる内早く重能は死亡せられし由遺憾是に不過北陸諸國擬聖の序幸なれば當國へ立越足下に初見参して活命の恩を謝せんと推参しいと仰られし実盛喜悦に堪ず。庭前へ

一頭の犬出きたりて、坐敷に入り、盃盤をなめ、ごとく、賓主酒宴の最中なるに、忽ち尾を垂れ耳を伏して、外の方へ去りぬ。義仲其躰を見て、心中に疑りむひ。渠畜生の中にも殊に臭骨熟肉を好む者なれば、酒宴の躰を見て、特に庭中を不去、臭肉の余れるを投与ふるを待ぬるに、却て怖を惶て、うろうろ、なく〳〵去るも、其意得がたし。実盛に對ひ曰く、彼犬を貴辺の畜か、猟狗か、ただ自余の犬と違ひ、酒宴を見て退去るに、頗る心有げなり。是八日来飼教へ、やと問へば、実盛打うなづき、渠が飼犬にあらざれども、故有て今は手飼ひなり。彼犬に付て一條の珍〻紀話の語りて、宴せんとす。此所より一里ばかり東、某村に壹人の悪女年の比十七八、放蕩無頼にして、恒の産なきに、博奕淫酒に耽り、或時は酩酊して、夜中に其所にもなく徘徊し、誤て即ち犬の脚を踏しに、犬は是に怒り、即時に犬を捕へて縛り、己が家に引

返り、種〻に責困し、剥ぎ、翌五日河に沈んと、件の犬を曳行く処に、前面より二人の糸商人来るを、悪女年が犬を曳行くを見て、其故を尋ねに、云の罪あるを流に沈めんと為なりと答へ、其時犬に糸商人の面を見て、洞を流し、助命を頼む躰なれば、商客是を憐れみ、価を貴ひ、犬の命を乞ひ、原来孝欲の兇漢是を承引して、銀子を得て、犬を解放し、彼商客の嚢中に金銀の多く有を見て、忽ち欲心を發し、遣過しに、彼商客を切害して、屍を河辺に提行き、草間に捨て、其上に草の葉折かけて覆ひ隠す。さあらぬ体にて、己が宿へ帰りぬ。彼犬潜に見定めて、其屍の廳前に到て、白砂に跪き、吠えて、其を紛る処有て、其も初は心付ざりし、下郎に命じて、追出さんとすれども、渠如何鞭撃れども更に居処を去ざ、益哀を吠て、眼中より泪を流して、雨の如く、茲に於て、某も不審に堪ず、紙に犬に向ひ、汝紛れて、百やと問ふに、犬點首なるを、下郎が衣服の裾を咬へ、曳て出んとす。是に依

く僕が命じ犬の行処へ後い行くらいへば。彼川辺葦間へ弛行又悪しげに吠い
ゆ僕何心なく折けし葦を掻分れば。朱に染まる死尸あり。傍に犬を曳
く既り云々の趣を告い。叔父を子細あらまく再び犬に向ひ汝彼者を切害
せし者を知りやと問へば渠は黙首僕の裾をくくへ引去んともすること以前
のごとし。是ほどまく犬を先立て三人の捕吏を遣しに。犬を一里ばかりも走
行て。一軒の草屋の門に立。捕吏を顧て鼻を鳴しいきて是ぞ曲者の所在な
らんと察し。戸の透間より窺ふ。一人の女年前後もちぶすま卧て在
頻に戸を踏破り狂入ば。犬先急ぎ進入て女年が足を強く咬さ放さず。女年
は是ほどまく働れ得ぬ。犬を拂ひ退んとあせる間に捕吏の者雑なく
女年を搦め戈既りに叔即尅跨問しに。渠已に悪事の條明白に白状し
ひぬ。然に因て渠を死刑に所し。摘渠が家内を捜ちに奪掠るる金嚢是
あり。改られば。沙金十五両余白銀七両ばかり。叔彼高家の屍を黙倹しに

生國何國にか知ぬ。くいへば。辺りの寺院に埋葬し。貝子は吊料として其まへ
寄附せ。ちいひぬ。斯恩を感じ。仇を復を義犬ゆくいへば。虎丸と呼ぶ畜犬
いに萬の動止自余の犬と同じ。飲食を喰残てなり。二使を邸中ゆく
せしと。人絡を皮分るて人に等く。世に珍しき良狗ゆくいと一五一十をうつ
れば。義仲倩其物絡を見て感泪を流しく仰ぎ。緘に犬を其種類
甚だ多く。毛色も准一なるに。殷の虞晋の槃。楚の擴韓の盧宋の狸是皆
良犬の名なりとぞ。彼廣陵の揚生が畜る犬を。草野に火の起る知く。
身を水に漫しく主の揚生が酔眠る四辺の草を沾。主の焚死せんとを
救ひ。曾嘗の張然が飼る烏竜といへる犬を。奸奴を咬ぐ主の危難を
救しに。書籍に挙ること多の。眼前に奇特の物絡を見
珍しきよ。盤古氏が一時の戯言を信じく敵首をとる。女を貪し悪犬悲令
公度を練らくる李甲が格言を怒て空衣を咬ぐ憤死しくる毒犬を。彼虎

義犬悪少年
を咬ざ
賊情を露
図

丸と日狐はうしろに結ぶ。願ひ出でて呼出しくと足せうかと望みあり。実盛承
はり。虎丸来たると呼れて邑外の大庭前へ来り揉端近くはあ
居たり。義仲熟と見るに咏長く眼実く肥大かく。毛八黒白斑なるが月
毛猛く勇ある勢ひを備へれば稍ありて感歎して嘘呼歎情の歎類
なるに義犬あり。恩人の仇を辨へ泉下の冤を晴さんとせよ。我或
人に生るるあり。犬の小なる狗と雖ども大なるを犬とし、其長咏なるに者を
善猟を見る田犬と云俗に呼び奪犬なり。其短咏なる者八善守る見を吠
犬と云ふ賊を防ぐ非常を守る。家犬にして丈大を孕て三月にして子
を産と上妻宿に憩て下駄木に属もと繦く霊あるに余数に勝れり。我
ぶ良犬を獲ふ。我今此犬を見るに勇壮にして長
咏なるに八所謂田犬なる者なり。我住地木曽北陸道に双なく深山幽谷の
地にて且夕田猟鳥狩を業とせれば各犬を得て山野に従ひ

亦何を憾んぞ頗る銀心望の色面にあらはれたり。実盛早く見を察して
ろに八君さらば御所望なるに此犬を進ぜい愛して構て愛憐を
加へて飼せよとのたまふ。義仲斜なるに御喜悦あり厚く礼謝を述て
虎丸を流石実盛の日来の情を捨て他人の手に畜へて我心苦しく思
ひ見育成低を愁然として見えれば実盛其躰を見て声を厲まして汝
我手を放生他へ行を憂ふ。我さしれども苟も此君八八幡殿より四代の孫君
木曽義仲公なれば実盛に八百倍勝れて主君なるに心を責て事よ。我を原
源家に事て数度の戦場一度も不覚をしたるに君の賞翫他に異なるに鳴
恩を蒙ると人に勝れて平治の軍に頭殿に別を参じて漂浪の身と成
源氏世に出るべき期を待んと程の足休めと。假に平家へ降参せに豈紛れ
小松殿の執達にて従来の本領安堵の上に当国武庫の別当を任
ぜられて此大恩を報ずべき報ぜんに平家無二の忠臣と成

空しく胸を究め世人乃嘲り然も顧ざれど斯て世に在顔ハ忘れども実ある我武道廃を果より其故ハ相國入道殿日々に官位昇進ありて奢侈暴慢乃行迹月を超て増長し賢息小松殿の風諫を納ず偏に我侭乃行条唐の安禄山に一般より争ひ久しく栄耀を保ち得て兎頃て源氏乃白旌洛中に充満せんとし鏡にかけて見るが如し其時に臨で我平家乃下知に従ひ源軍に向ハ是三代相傳乃主君に弓ひく逆臣なり。さりとて平家を背て源家へ馳加り平軍を伐ば是恩義我ちて賊臣なりとても何方に従ひ何方を棄べき我ながら一旦の過に依て反覆表裏の名を流さんと千悔すれどもかへらず只都に大事有と告れ先鋒を望みて討死せん乃外施すべき謀なしされど猶降参不義乃汚名を雪にハあらず斯浅猿き我を捨て勢ひに募ずして日本の大将軍とも仰れ玉ふべき君に飼畜とて八盲類としへども主の恩報乃いとどおのれおもやと人にいふて擧口銃ある是実盛平家の累恩を懐

り義仲に大義を勧めまいらせしくおもへども今ハ平家恩顧の身なれバ露に其しく我口外せんも都への聞えを憚りて天に繩して義仲乃心を励まし後にぞあすひ合されよ。虎丸ハ実盛が頭を突さしてや頭を低手酒を流して恥かしとえ来し戸の外へ出去り時に実盛近習に向ひ長物緒に酒宴乃興を醒せり銚子を改め今一献を勧めなりけるへと命ずれども義仲是を制し玉ひ先達より数盃を傾け頗ぶ酩酊せり今ある盃盤を収め玉へと固く辞し玉ふによりさしもの左も右もなく酒宴を収め饗膳に山海の珍味を竭しく饗し進らせける。義仲主従深く実盛が厚志を謝しくよ程に喫終り其夜を止宿し。翌日実盛に別を告彼虎丸を従者に牽せて立出玉へバ実盛も余波ハ尽ず。おぼろ。一里許見送り遂に袂を別ちけり義仲ハ信州へ実盛ハ永井へぞ立かへりける

義仲母公死去并観心房相義仲條

去程に木曽義仲、武蔵を経て古郷の宮を臨み路を急ぎ給へども日を経
て木曽に帰着し給へども疲足の日々如くなれども仁安三年二月に
出て同年十月に帰り給へども歳行の間九ヶ月が程なりしに兼遠、義仲
の帰り給ひし成り行き且悦び且患ひなげき先其安躰を賀し叔母の御
母堂小枝殿の御事去る八月の末より假初の風邪の心地にて臥給ひ
そろそろ日数追て疾病となり医療手を尽し加持祈禱怠りなく様々
に定まれる事なや聊の験もなく次第に頼もしく見え給ふより何
卒生前に御親子の御対面させ進ぜんと願ひ心中の国々へ早使を立て
尋ね遣ひなるべきと東国へ向ひし者ども帰らざるを心を困めしに能
く御帰国ありし急ぎ母君に謁し給へとのたまふ義仲大に驚き給ひ傾
く母君の病床に立入其より侍女おやまをせ給へ小枝殿の八新と聞給ひも嬉
に重病枕をもたげ義仲を近く招ぎ苦しげなる息の下に仰せられ

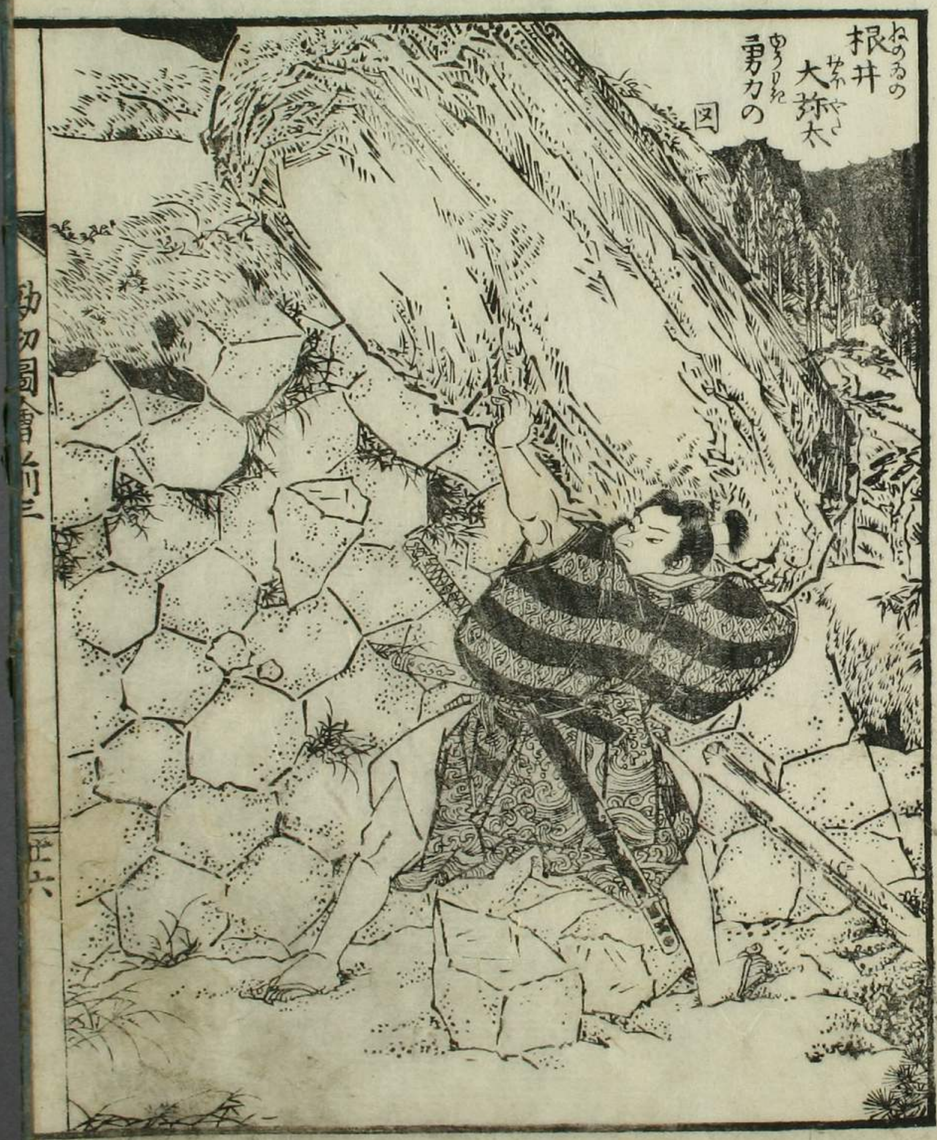
妾去る秋の半より假初の事に臥し次第に病若を増し今は此
世の限りと覚へ候へども未期に今一度見へ進ぜんと所有神仏に
祈誓し候へども甲斐なく今逢まゐらせ嬉しさよそも妾此国に由縁有
しに兼遠来り時より臨終の今に至る兼遠夫
婦の人々重代の主の御に敬ひ傳へ給ひし鳴恩何の世に報ずべき
妾空しくなり後に丈婦の人々を実の親と思ひ朝に夕に孝行怠り
なく兼遠主の力を借て支御の家名を引継ぎ時節もあらば構へて短
慮殺伐の行迹なく只仁徳を以て人を懐け萬の進退兼遠主に及び智
慮深く人々と高議し其良に就て進も退もなく古へも今も智勇有
人々の其能に慢じて国を失ひ身を亡ぼす例ありと已に御身の又
君に対し武勇の世に高き一朝の短慮より身を亡し家を失
ひ妻子を散々零落なし前車の覆を見て後車の戒とせよと宣に

の事をやりてなごり忘れも智ふ慢し勇猛憑み此國人ふる躍れ歎と
妾死したりしも追福作善ふ心を用ひ歎ふ時節をうち及君の家名を
引興し歎ふてそ妾ごとふ七基の塔を建るふ勝る追福ふいとと操返しに
練め繁言り歎ふ義仲悲歎の中ふも母公の教訓骨髄ふ泪なく仰ぐハ
宜くと処悲し理の至極ふく肝ふ銘じ忘れいず其ハそうるを吾母ふ齢
傾たるふもまでも心を強くなし何事をも念じ歎ふど勤く薬湯を服
し今一度快復し歎と練め歎ふ病者ハ歩黙首歎ふ何うなる日言
歎ふど只ハ内ふ佛の御名をのみ新歎ひくるゞ其翌日酉の尅をうふ眠ふ
ゞく息断歎ひり義仲ゞ悲歎を以て更なり兼遠丈妻侍女乳人ぞ
深く愁傷し哀泣の声室中ふ充々されども返ねど道なれど泣々菩提
寺ふ送り埋葬しく遂ふ北邙一堆の塚の主とぞなしふる義仲公人の
慈母ふ別きく腸を断歎ふ沈みひるゞぜやくハ母君の後生善所の為ふ

もしく木曽の近卿須原寺ふ結住僧観心房と道徳いとゞ聖人り
御對面ありく仰ぐ其ゞ母既ふ無常風ふ誘れ九泉の旅ふ赴もれ
ひ其菩提の為経論を薄續しくいぶそも女人成佛の為ふ如何なる
経を續ひ給ふ願くを長老我ふ示しまくと問歎ひ観心房答ていはく
ハ君いまゞ御若年なるふ母君の善提のる編経しまくとの御志を雖有
れ抑如来一代の経論多しくとも其功徳法華経ふ増るものいとゞ丈法
華経の德を独女人成佛の為ふあゞび山川大地千草萬木ゞ佛果ふ
いたりい拠如来の法門八宗十二京ふ分き自至他破の見識盛ふしく因を
聯し脇を振大乗小乗頓漸の勝劣を争ひ横竪縦横とゞも其
要ハ一致ふくい並れども女人を五障七去十悪とて罪も罪深く已い大論
ふも女色を視ること以赤銅如轉眼中其身ふ近付ハ如觸毒蛇と戒ら
或ハ女人を以て若先蛇ゞ或ハ内心如夜叉なゞ緒経ふ深く厭ひ

されど成佛得脫は最も難きすなりされども諸佛大慈悲の誓願を起し女
人成佛の方便を成ぜんと弥陀の誓願を初とし其他率く寡べ
中にも法華經の功力第一なり已に提婆品に竜女成佛を說又草木國土
悉皆成佛とも說きされど増て人間に於てをや假令女人なりとも爭ぞ成仏
せざらん大聖世尊此法華經を說給ひ只一偈を聞者も成佛疑ひなし
と宣へり縱ひ聽聞隨喜の一偈の功德さへ如此況や君旦夕に讀誦し給ふ妙君
九品の淨土に生し給へと何の疑ひか有べき君さへ行住坐卧に心を妙法蓮
華の妙の一字の上に置給へ抑此妙の一字を佛心宗には正法眼藏金剛正眼
祖師心印吹毛劍無位真人なんど種々に號け淨土宗には弥陀と云真言
宗には阿字と呼其外道家には谷神と云儒者は大極と号し華嚴法相
三論俱舍成実律宗にいたるまで深秘奥義とする所皆此妙の一字の外に
不出故に如来も汝等舍利弗聲聞及菩薩當知是妙法諸仏の秘要

也と說給へり佛四十余年の說法も妙の一字を衆生に悟しめんが為なり最後
に一字不說と宣ひ拈華微笑の直下に終く正法眼藏涅槃妙心摩訶迦
葉に附屬と宣へり唯心妙の一字に盡きぬ茲に道理を付舌を
翻し妙の一字の本旨に背たり佛は一切不說と宣へを末世の衆生貪道の
愚凡智をもつて說に一物を以てもれで即ち不中諸法寂滅相不可以
言宣へども說給へり說不得上にこと妙の字はいべき柳は緑花は紅樹は青く
其色異なりといへども其發根本を尋ぬれば陽春の気なりなどと諸宗の
指教る道は異なりとせども成佛得脫の場に至りては一般なり歌に曰
とけぬるに麓の雪の高峯の月をみがむる
とはしねひたる心傳心の所とて即ち法花經の妙なるに只々御追善にて
此御經を讀誦し母君尊靈成佛しむんと何の障りか有べき
れば義仲隨喜の涙を流し給ひ滅に難有御教示にて


ねのゐの
根井
大蛇太
勇力の
図

ゝ師ハ実ハ當時の碩德なり。今日より義仲ゞ祈り師と頼ゝ申ゝ。
但し人の中に。須原の観心御房ハ博学高德なり。耳なれ善人相を見
定め。人の未前を察ゝ掌の物を指ゞゝと。願くゝ其ゞ相を見行
末の吉凶禍福をも指示しゝ。観心房哂ゝ曰。貧道佛道ハ人に
へゞも。爭ゝ如来のゞゝ。六神通を得ゝ人の未前を察ゝ掌を得ゞゝ。其ハ只ハ
観心を誉ゝゝ。ゝゝの空言ゆゝゝゝて取あゝれを。木曾殿猶強く清霊む
ゝふゝ。観心已事を得ゞゝ。義仲
ゝ面を稍久くゝゝゝゝ。滅ハ君ハ大将軍ゝ威相を備へ。ゝゝ。其位
ハ到りゝゝゝ。門属類ハ離れ久く栄花を極めゝゝ。其故ハ包気不
顕德ゝゝ相ゝませゝ。此相を轉化ゝ生涯安楽長命なゝゝとなゝ。只
身を慎ゝ切を他人ハ譲り。亟ゝの人となりゝ。若十分望を達せんとゝ。ハ
禍ひ忽ち御身ハ来ひゝゝと申れゝ。義仲生まれ。滅ハ師ゝ眼力ハ天眼通

とゝ。ゝ。我慎ゝ教訓の旨を守りいゝゝ。孝ゝ施物を引別を告ゝ飯りゝ
ひゝるゝ心中ハ。我平家の兇暴を伐亘将軍職を得ゝ。丈ゝ身の本懐な
ゝ。命短ゝ患ゝハ。ゝ。長命なゝ。祿ゝゝゝ人の下風ハ旅を屈
せんハ大丈夫の所作なゝゝ。思ゝゝ不敵なゝ

根井父子属義仲條

斯ゝ義仲ハ観心房ゝ勧ハより母公ゝ追善ゝゝ朝夕法華経を誦ゝ喪を
勤めハ。ゝゝ何ゝ中陰も充れゝ兼遠兼保ゝ道ハと対ゝ使者をゝゝ
彼巴子父子を呼迎へ。父安太丈ハ郎を父ゝ安居ゝ。巴子ハ武芸兵学を
学ゝ世ゝゝハ。元来聰明令利の婦人なれゝ。日ハ従ゝ武術軍学を上達ゝ
歴々ゝ男子も巴子ハ向ひゝゝ及ゝゝ。ゝ多れゝ兼遠ハも希代ゝ勇婦哉
と吾を震ゝゝゝゝ。ゝゝ。光陰押移りゝ義仲早十九才ハ成ゝ
れゝ。海野入道兼保ゝ女山吹をゝゝ室家とゝ。巴子を以ゝ妻とせゝ。丙婦

ゝも婉娩貞従の賢女なれば互ひに相娵の心なく信をゝ木曾殿に傳たつゝ
くるゝ。義仲も両婦を寵偶あふこと浅ゝと比目の契濃ゝ偕老のさゝひ
深く次の年山吹前懐妊あり。玉のごとく男子を産ゝ。義仲をよろこ兼
遠又子の悦び大方ならず。家門他門より祝賀の使者門前に市をなす。
なり。義仲初めの御子なれば〻〻名を太郎丸と呼ぶ。後に清水冠者と
いひ。此若君のこゝろ丸去程に義仲年の長じるに従ひ文武二道に達
し胸に呂望韓信が智を貯へ臂に項羽樊會が勇を蔵ひ遠近風を
望んできたり。其旌下に属する者日々に不絶心なく土民村翁まで木曾
殿と称し其智勇を賞せざるはなし。茲に門國滋野の住人に根井大
夫行親といふ武士あり。數代當國に住居して武勇の誉隣國まで隠
なき。家門も豪りなり。行親に二人の子あり。兄を大弥太忠親といひ弟を
猶六郎近忠と呼り。両人とも力量衆に勝れ就中大弥太が五十人に敵

一弓馬戟剣の術に長じたり。或時又行親家城の修理せんと人歩を以て
堀を穿せる所に巨石に堀中り是を取捨んとすれども人力を合せども動ずして能ざる大いに倦
れたり。人歩ども高議し明日立夫し人歩を増して取捨んと。其日も其侭差
置ぬ。大弥太其頃をいまだ十五才の童なりしが借ありしに我生得力
量強くして人に重しと称する程の物もなきと。彼土中の石幾許の重さ有てう
衆くの者どもの堀徳をいぶし石の重さを測ぶ弱さを試しに乙と夜中に
人にもふせずして金剛履をはき堀へ飛入件の石に手をかけて曳起ぶに
重しとも覚へざれば大弥太独笑しまれどもこの石の重さはあらじ人歩に
弱さなりと謗さに頓て其石を搏て平地へあげ猶三町ばかり搏て
行大道の真中に有て敢りなり。斯て翌日に人歩共二十人ばかり堀
の石を曳上んと行てかゝるに更に石あらじ只巨さなる穴のみなれば是を

何者ゝ取捨ーゆゑんと評議まちまちなる処に一人の者走りきたり彼処の大
道に大石横たはりて往来の牛馬通行の妨となれり急ぎ人々力を合して取
退くべしと大息吐くのみにて人歩に益不審し走行くべきに果して
路の真中に大石あり倩思ふに是昨日堀中に石なれば大いに驚き斯許の
大石を一夜の中に杏なる云おく取出せば金剛力士の業なり天狗の所為らんと驚
嘆せざる者なく世人行くゝ野外に彳躅退くり其後大弥太が所為也
と唱へ名れば諸人其若年にして怪力ある哉賞讃し其風貌麟國ぶるも
又なり扨大剛の忠親なれば天下に手本とする者あるべしと思繕り居る頃
日老となり者となる木曽殿の勇武を賞し其汝法街に喧し大弥太を
も木曽殿の旗下に勧むる者有るに忠親嘲笑の世人何ぞ耳哉尊び目を
賤しむるや丈物に見て聞との違ひ有彼貴人の儒子何許の勇有るべき斯田丈野
人を威もちゝ我對面しく渠の新膳を拉んと夷物造の大小指強らに一僕を

従へ兼遠が家城に到り案内しく木曽の面會せんを望み通ず今井
が是を聞て扨も根井も旗下に属せん下心にきれるなるべしと請じ入れば
曽殿の御前へと通ずるに大剛の身の丈六尺余にして
眼環くして巨に色飽まで黒く鎌髭腮に成て筋骨あるまでも荒々し
男なれば心中に其胡貌を快く紛を和ぐ仰ぐに人々根井氏の武名を聞
ども未だ見参せざる頗る本意を失ひ遮て来あるに崖躍して不堪抑
何曳の駕を促すやとあるに大弥太さに一揖ぶもせずして曰我今日南
城へ参ること別事なしと頃日女童の物絡に御辺が勇力有りと成すとも
眼前に見ざれば信ずるに不足さるに依て城が空言成拭さんと推参せり
いざ我見前に力の程を見せられよ若見ることあれば参ん是怯弱にして名
を售者なりといふに殘らず云ひ今井通口海野なんどの諸勇士大いに怒り
色気立るを木曽の早く図給く諸士を制し扱忠親に向ひ静に仰せられ

根井を當國ゐく數代の住人代々武名を損されど別しく御辺八人も紆せ弓
取なれど如何なる難問ゐやとおりしゐ最安に問条なり去なくし勇ゐも五の品
あり。夫深山函谷ゐ入猪狼を暴ゐ。猛獣を撃く恐るべきハ猟人の勇あり。海
底ゐ入波濤をくぐりく蛟竜を切鯨鯨を刺ハ漁者の勇なり。高木ゐ攀登
り危峯ゐ翹四望しく顔色変ぜど脚慄ざるハ樵夫番匠の勇なり。揃くハ必を
刺視くハ必を殺しく悋ざるハ典刑の勇なり。百万騎を進退ちくこと手足の如
く縲を方すゐ定め。陣を宥し背を伐百度戦ひく百度勝ハ霸者の勇あり。
五勇各等しくず。不知御辺が望める勇ハ何の勇ぞやと。弁舌流水のごく羊
句もよどまずと曰へだざしも我慢ゐ根井ちと差繕り。一言も答ること能ハど。
全身汗を流し赤面しく在るゐ忽ち遥ゐ推下り。低頭平身して曰。絨ゐ
某匹夫の勇を忍ゐ慢に。君子の大勇をもちず。猥ゐ厳威を犯いしゐ恥
しさよ。君が大勇至剛の肅の窺ふ所ゐあるに。願くハ自今以後某をも

御旗下ゐ加へむゐ。御馬の轡ばくを大馬の勇を
盡しゐ乙と真実飯伏の色を顕しゐるゐぞ。木曽殿欣悦浅ゐ実や玉ハ
當く砕ゐ瓦漢しとハ御辺のことなり。古人も萬卒ハ得安く一将ハ需ゐくと
いふ。以後ハ水魚の交りを結びゐ。其より大宴を開ゐ木曽殿忠親と
主従契約ゐ盃を取ハしゐ。夫より緒士一同ゐ歩昆しく君臣和楽の酒宴
ゐ列士酔を盡しゐ。扨酒盞終りく根井ハ御暇賜ハり。家域ゐくりて又の
行親ゐ縋し。木曽どの寛仁大度を語り。維下ゐ属せし音を明しく敗降
を勧めれど。行親も平家ゐ暴虐を悪む心あるゐ故承引し。二男六郎を
率連くく木曽へ到り。大将ゐ拝謁しく旗下ゐ属しぬ是ゐ因く根井が家門の
根津望月を初しく多くゐ党ゐ木曽殿ゐ肇ゐ従ふ程ゐ追そう
勢ひを得むひゐ。都ゐハ平家の一門昼夜絃歌吹弾ゐ耽り。酒盞淫楽ゐ荒
上下とも口ゐ泰平無歓を唱へ。引箭兵学ゐ之月も廃れ東国北國ゐ

天下を呑んとする竜有り已に飛躍の気を顕はすと八夢わゆるとこと喜ぶ
危ひ多し